

# 台湾における社会参加仏教集団からみた 在家者の再編成—慈済会の事例を中心に—

陳 文 玲

## I はじめに

本稿は、社会参加仏教の宗教団体である慈済会の事例を中心に、当会にボランティアとして加入する在家者が組織化される仕組みを、説明することを目的とした論文である。台湾では仏教徒は、聖職者<sup>1)</sup>つまり出家者と、一般信者つまり在家者という2つのカテゴリーに分けられている<sup>2)</sup>。慈済会は創立者が出家者であり、メンバーの大多数が在家者であるという仏教団体である<sup>3)</sup>。

表題にある「社会参加仏教」とは、インド出身の社会学者ランジャナ・ムコパディヤーヤ (Ranjana Mukhopadhyaya) が、仏教徒の運動・活動の特性や、仏教者や仏教学者による用語・概念を考察したうえで、近代日本における仏教の社会活動に対して、Engaged Buddhism という用語を和訳したものである (2005)。ムコパディヤーヤは、社会参加仏教を「仏教者が布教・教化などいわゆる宗教活動にとどまらず、さまざまな社会活動も行い、それを仏教教義の実践化と見なし、その活動の影響が仏教界に限らず、一般社会にも及ぶという仏教の対社会的姿勢を示す用語である」と述べている [2005: 28]。

そもそも社会参加仏教の原語 Engaged Buddhism また Socially Engaged Buddhism は、ベトナムの僧侶ティック・ナット・ハン (Ven. Thich Nath Hanh, 1926 A.D.—。「一行禪師」とも呼ばれる) が、ベトナム戦争中の反戦運動への仏教僧侶の参加を説明する際に最初に使用したものである。ティック・ナット・ハンが提唱したような政治的な反抗運動から、平和を提唱・推進するあらゆる形式の活動、さらにさまざまな社会問題にいたるまで、仏教徒が積極的に関わるという社会参加仏教の宗教的な実践は、その後世界各地で展開されてきた。1989年に「仏教者国際連帯会議」(International Network of Engaged Buddhists, 台湾では「国際入世仏教協会」<sup>4)</sup>と訳されている) という仏教徒の連合組織が創設されたことを契機に、世界各地域でローカルな次元で行われていた仏教徒の社会参加活動が、ネットワークを通じて国際的な仏教運動と結び付けられようになったのである。近年、台湾の仏教団体は、国際社会における社会参加運動と連動するようになり、そのなかでも、とりわけ仏教徒ボランティア団体「仏教慈済功德会」<sup>5)</sup> (以下、慈済会) が注目されている<sup>6)</sup> [cf. Barnes 1996: 275-278, Huang 2003: 136-153, 2005: 1-38 etc. ]。

クイーン (Christopher S. Queen) によれば、社会参加仏教であるか否かを検証するには、以下の諸要素が示されなければならないとされる。それは、第一に仏教の社会運動であること (e.g. 上述した 1963 年にベトナム僧侶ティック・ナット・バンがリードした政治的な反抗運動と平和運動)、第二に従来とは異なる新しいタイプのリーダーがいること (e.g. ダライ・ラマ、インド新仏教運動をリードしたアンベードカル博士、日本創価学会の創立者・牧口常三郎 etc.)、第三に原始教義 (Ancient Dharma) に基づく新解釈であること、第四に現代的な手段<sup>7)</sup>を用いて社会参加の目的を達成することなどである (Queen 1996: 4-16)。黄 (Chien-Yu J. Huang) は、クイーンの提示したこれらの諸要素を参照し、慈済会にはそのうち 3 つの条件<sup>8)</sup>が存在しているため、社会参加仏教というカテゴリーに位置づけた (Huang 2003: 137)。本稿では、これらの先行研究をふまえて、慈済会という仏教団体を社会参加仏教として扱うことにする。なお、慈済会が実践する社会参加活動 (病院における奉仕) について、筆者は既に別なテーマで取り扱っている (cf. 陳 2006 b)。

本稿では、慈済会の創立の経緯、組織の成長および慈善事業の展開を述べた上で、そうした慈善事業をサポートする人的資源および資金源を獲得する組織の仕組みを説明する。さらに慈済会のボランティアたちが、慈済会の人間であるというアイデンティティを如何に形成してきたか、という問題意識に基づいて、慈済会のボランティアたちの制服着用に焦点をあて、慈済会の内部からみるメンバーたちの観点、および慈済会が外に向けて社会活動をする際に、慈済会メンバーではない人びとがみた慈済会の制服に対するイメージという、いわば慈済会の内的と外的という 2 つの側面から分析する。

それにより、慈済会の人間としてのアイデンティティを強化させる要因を考察しながら管見を述べる。その際、慈済会に属す内部の人間と外部からの批判的な見解を対比的に提示する。そして、それぞれ異なる契機で慈済会に入会した慈済会のボランティアたちは、本来はお互いに縁もゆかりもない関係であったが、そうしたかれらが如何にして連帯するようになったのか、また、なぜかれらは慈済会に対して忠誠心が強いのか、それらの要因を探求し、解釈することを試みる。

## II 慈済会の創立経緯

### 1 創立者について

慈済会の創設者・釈証嚴 (以下、証嚴師) は、1937 年に台湾の台中県清水鎮で生まれた (cf. 陳 2006 b: 110-115)。彼女は幼い頃から同県に住む叔父夫婦の家に養女に出され、裕福な家庭環境で育った。養父母は台湾中部の都市で映画館を経営していた。15歳の時、養母が胃の手術を受けた際に、彼女は養母の病気が治れば、自分の寿命が縮まってもかまわないと祈って、「観音菩薩」の名を唱え続けた。そして、3日間続けて観音菩薩

が養母に薬を与えた夢を見る経験した。その後、養母の病状は次第に良くなり、彼女の願いは叶えられたという<sup>9)</sup>。1960年には、養父が脳梗塞で急死した。ショックを受けた彼女は、「(養)父は今どこにいるのだろうか」と思い悩んだという。彼女は、養父が生前に行っていた寺を訪れ、見様見真似で経を唱えて養父を供養した。そこで仏教教理のすばらしさに惹かれ、将来、出家して仏陀の偉大な思想を社会や知識人たちにも広めていこうと決意し、出家を考えるようになったという。

翌年(1961)秋、彼女は意を固め、家族の反対を押し切って家出した。それから各地を転々とした彼女は、花蓮市郊外にある小さな寺<sup>10)</sup>に身を寄せて、寺の裏にある小屋に一人で住み着くようになった。1963年、彼女は台北市で中国仏教会<sup>11)</sup>による具足戒の受戒儀礼に参加し、比丘尼になろうとした。そのとき偶然、彼女は戦後に中国大陆から渡ってきた仏教研究者である印順師と出会い、その場で正式に弟子入りして証嚴という法名をもらったのである。その時、彼女は師匠から、「為仏教、為衆生」(仏教と衆生のために尽くさなければならない)という教えを受けた(金子 2005:181-182)。彼女は師匠のこの言葉に強い影響を受け、後に慈済会を設立した(静思書斎 2002:130-131, 釈 2005:6-9)。

1966年2月、証嚴師は入院する知人を見舞いに花蓮県の診療所を訪れた際、交通が不便な東部山地に住む先住民女性が、経済的な貧困ゆえに診療所で治療を受けられずに流産したことを知った。証嚴師はショックを受け、何とか貧しい人々の問題を解決し、かれらの苦しみを和らげたいという思いを強めた。また、ある日宣教している3人のカトリック修道女が、証嚴師の住居にやってきた。修道女らは証嚴師と互いの宗教信仰について議論した末、「仏教は社会に対する具体的な貢献に乏しい」と指摘した。そのことが証嚴師を深く反省させ、交通が不便で医療設備も整っていない台湾東部に病院を設立するという計画をたてた(陳 2004:63-65)。これらの出来事こそ、証嚴師をして仏教の教義と社会奉仕とを、いかに関連付けるかを考えさせた大きな契機であった。

1966年4月14日には、慈済会の前身となる「仏教克难慈済功德会」(以下、「功德会」)という慈善団体が結成された<sup>12)</sup>。「帰依」<sup>13)</sup>を希望する信者に対し証嚴師は、「功德会」の組織幹部となった人が奉仕活動に参加すること、寄付金(および寄付者)を募ることを義務とすること、という条件を提示した(陳 2003:56, 2004:67-69)。

1967年7月に発行されている「功德会」の機関紙には、寄付金の額、寄付者の名前、出費明細に関する会計報告が掲載されており、それによると「功德会」に寄せられた寄付金は、証嚴師をはじめとする出家者たちへの布施ではなく、貧困者への救済という目的のみのために管理されたとされている。

このように出家した尼僧たち<sup>14)</sup>は「功德会」への寄付金に頼ることなく、証嚴師とともに、唐時代の高僧に由来するとされる「一日働かなければ一日食わず」、「信徒の供養を受け入れない」という厳しい戒律を遵守した。尼僧たちは創始期から現在までロウソクや手

工芸品、穀物加工食品などを生産・販売して得た金銭を収入源とし、自家栽培の野菜などを食して、自給自足の生活をいまだに続けているという [金子 2005: 139-140、209]。こうした証嚴師の姿勢を、清貧かつ自律的だと評価する人々が現れ、彼女に従って出家や帰依を希望する者が、さらに増加した。また資金の明細を公表するという、会計の透明性が寄付者の信頼するところとなり、世間からも好評を得ることになったのである [王 2005: 279]。

## 2 組織成長と事業展開

慈済会が成長している理由は、かれらが採用した募金制度とメンバー組織の仕組みにも関連している。募金制度と組織の仕組みは、在家者が再編成されるメカニズムとかわっているの、その点は次の章において述べることにする。

1970年代に台湾では経済が徐々に発展し、西部の都市地域を中心に経済発展がとりわけ進んでいたが、東部では、まだ開発が遅れており、人々の生活は厳しい状況にとどまっていた。その時期の慈済会は、東部の住民を対象に定期的に小規模な無料診療を行い、または貧困者への経済援助を実施していた。一方、証嚴師は台湾東部に病院を建設するという夢を抱いて、台湾全島で巡回講演し、東部の住民を援助するよう人々に呼びかけ、また台湾各地で会員を募集した。

1979年には、慈済会が結成された当初からの重要目標であった、病院設立構想が実現する段階に入った。建設用地獲得の困難、建設資金と専門的知識や技能をもつ人材の不足などの問題に直面したが、総合病院設立という構想が慈済会の月刊紙や一般のマスコミの報道を通じて、人々の関心を集めるようになり、さらには政府高官や当時の蔣経国総統も、慈済会の病院建設計画に関心を寄せるようになったという [何 2000: 72, 金子 2005: 104-106]。その後、1986年には、慈済病院は花蓮市内の西北部、花蓮駅から徒歩15分ほどのところに設立された。医療施設が少ない台湾の東部地方での病院建設を果たした慈済病院は、貧困者のために入院や、手術に必要な事前保証金納入制度を廃止する方針を打ち出した。慈済病院のこうした病院運営の方針が模範とされ、台湾の他の大規模病院でも同様の制度が廃止されるようになった [何 2000: 115]。他方、緊急の災害が発生した場合、当該地域の慈済会のボランティアが現場に駆けつけ、状況に応じて救援体制を整える任務も負った。こうした財政面の透明化と具体的な救済・救援実績が評価されるにつれ、慈済会は人々の信頼が得られ、花蓮地区だけではなく、台湾全土でもその名が知られるようになり、会員数が次第に増加したのであった。

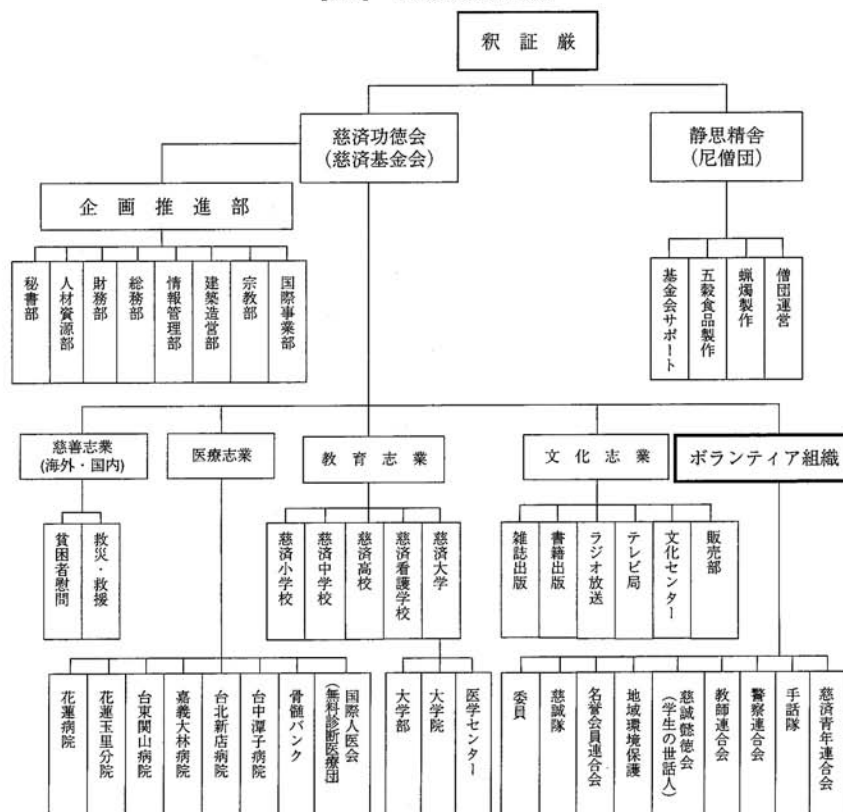
## Ⅲ 人的資源と資金源を獲得する仕組み

こうした慈済会の社会貢献事業をサポートするには、いずれも資金源と人的資源が欠か

せない。慈済会がこれらを獲得する仕組みは下記のようになっている。資金は、寄付金、出版事業、物販の営業収入<sup>15)</sup>、資源回収<sup>16)</sup>、バザーなどで集められる。これらの中でも、寄付金は重要な資金源となっている。また、慈済会が採用した募金制度は、人的資源を獲得する仕組みとも関連している。

慈済会の主幹となる人たち、および一時的に活動に参加する人たちは、みなボランティアである。それ以外の各事業体、例えば、学校、病院、テレビ局は一般の機関と同様の人事制度が採用されている。これらの事業体では、運営面において最低限必要な人数の専門職やスタッフなどが、有給職員として雇われている。これらの有給職員の仕事を補佐する人的資源としてボランティアの組織があり、各事業に適当な人数が配置されている。本稿では、もっぱらこのようなボランティアたちを対象にすることにする（図1参照）。慈済会のボランティア組織には、そのほか「慈済教師連合会」、「警察連合会」、「慈済青年連合

【図1】 慈済会事業組織図



(太線の部分が本稿の主な対象である)

会」、「慈誠懿徳会」、「慈濟人医会」などという付属的な組織もある。これらは職業別になっていて、慈済会のボランティア活動を支援する役割を担当している。

## 1 人的資源——ボランティアの編成

ここでまず、慈済会ボランティアの編成に関する諸用語を説明すると同時に、ボランティアの編成についても説明する。

会員：慈済会に寄付金を支払った人は、自動的に慈済会の会員となる。支払いは、定期的に金融機関を通して支払う方法があるが、口座自動引落しも可能である。また、集金資格のある委員（詳細は後述）に定期的に集金してもらう方法もある。以上のいずれの方法にも、寄付者の名前と住所がすでに慈済会に登録されているため、会員番号が付けられており、寄付をすれば慈済会発行の領収書がもらえる。寄付をして個人名が登記されれば、基本的に慈済会の会員になるのである。こうした金銭的寄付と活動は別活動として扱われるので、会員は寄付する以外に、慈済会の活動に参加する義務はない。なお、上述のように定期的に寄付金（慈済会では「功德款」または「功德金」<sup>17)</sup>と云う。以下「功德金」と表記する）を寄付する者のほか、定期的に寄付をする一般寄付者もいる。会員は逐次補充され続けるため、その数を正確に把握することは困難だが、慈済会は2005年5月の時点で全世界に500万人超の会員が存在するとされている<sup>18)</sup>。

名誉会員：100万台湾元（日本円約350万円）<sup>19)</sup>を寄付すれば<sup>20)</sup>、誰でも名誉会員<sup>21)</sup>になれる。慈済会の名誉会員になれば、証書をもらうほか、年1回慈済病院で無料診察を受けられるというメリットがある。台湾元100万の寄付金は、1回に限らず、正規メンバーとなっている者でも、また本人ではなく家族の名義でも寄付することが可能である。つまり、この場合、寄付者本人が知らずに名誉会員となることもあるし、家族および本人が重複して寄付する場合もある。なお、名誉会員は、以下のような正規メンバーに課せられた義務を、行わなくてもよいという特典がある。

委員：各地区単位で実施する2年程度の研修を履修し、先輩の委員らによる認定を受けて、創立者の証厳師から委員の識別証と「慈済服」（次の節で詳述）を授与された男女が委員となり、慈済会の正規メンバーとなる。つまり、かれらが慈済会という団体を運営・支配するボランティア組織の幹部となるのである。なお、委員になる者は、最低40名の会員を確保して、金額の多寡に関わらず毎月の「功德金」を集めることが義務づけられている。このような仕組みによって、慈済会の人的資源と資金源が一定程度確保できることになる。なお委員には、「慈済十戒」<sup>22)</sup>の遵守が求められる。ここで注目すべきことは、政治参加や政治に関与することが禁止となっていることである。

「慈誠」：委員とはほぼ同等の研修を2年程度履修し、委員らによる認定を受けて、証厳師からの識別証と「慈済服」（次の節で詳述）を授与された男性の正式メンバーは、「慈誠」と名づけられる。1991年に、男性のみのボランティア組織が結成された。当初のメンバーの大半は、女性委員の夫であった。彼らには「功德金」を集金する義務はなく、主として集会やイベントにおける警備、交通整理、物の運搬など、女性委員を補佐する役割が与えられていた。1999年の台湾の大震災の際に、救援活動に男性のボランティアを求めるニーズが増したため、その頃から、「慈誠」になる者が次第に増えていったようであった。なお委員と同様に「慈誠」にも、「慈済十戒」の遵守が求められている。とくに酒・タバコ・檳榔子は厳禁になっている。

見習委員：委員ないし「慈誠」を目指し、上述のいずれかの研修コースを履修中の男女のこと。正式の委員になる以前の段階であり、委員が入会の勧誘をするとき、募金やボランティア活動の手伝いなど、陰でサポートする役割を果たしている。この段階では、上述の「慈済十戒」を犯さないこと、つまり、いままでの悪癖を直す準備の時期とされている。

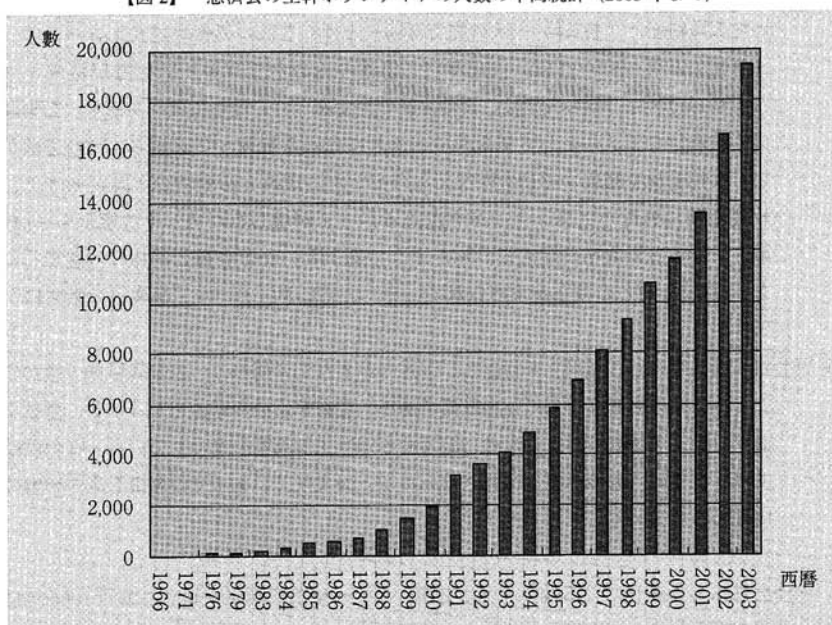
慈済会自体が公表している統計（図2参照）から、慈済会病院が設立された1986年以降、慈済会の主幹である委員と「慈誠」の数が急増していったことが読み取れる。委員数の増加は「功德金」を支払う会員数の増加、ひいては慈済会にとって潤沢な運営資金が確保されることを意味している。こうした状況は、1980年代以降、台湾経済が急速に発展するにつれ、高所得者層や経済的余裕のある人々が慈善事業実績をつみ、慈済会に関心を寄せていったためであると考えられる。

## 2 資金源を獲得する仕組み

慈済会では、銀行や郵便局での自動引落としサービスが普及している今日でも、委員が会員と直接面会して集金する方式を採用している。それは、委員との直接的な接触を通じて、会員らに慈済会の理念を理解してもらうためだとされる。また慈済会では、寄付者からの「功德金」が税務署によって税控除対象になるようにするため、「功德金」を受け付けるたびに領収書を発行し、毎年年末に同会発行の雑誌などを通じて、慈済会のすべての収支報告を対外的に公表するようになっている。

前にも触れたように、慈済会の草創期に、証厳師は慈済会の組織幹部に対し、奉仕活動に参加することと、寄付金（および寄付者）を募ることを義務づける条件を提示していた。当時の寄付金を集める方法として、証厳師はまず、信者らに対し毎日5角（現在の日本円換算で150銭）を竹筒に入れて貯金することを勧めていた（王 2005:276-277）。そのため、後に慈済会の草創期のことを、創設当初の労苦や当時の会員や委員に対する敬意

【図2】 慈済会の主幹ボランティアの人数の年間統計（2003年まで）



（慈済文化志業中心編集部 2000～2004）にもとづき筆者が作成

をもって、「竹筒歲月」と呼ぶようになった。2006年に慈済会が創立40周年を迎えた際に、証嚴師は、再び草創期の「竹筒歲月」時代の募金方式を国内及び海外の拠点に対し、推進しようと呼びかけた。慈済会に所属する施設においても、ボランティアたちが奉仕活動を行なう場所にも、コインを入れるための竹筒が用意され、コイン募金を呼びかけている。これらの募金は、会員寄付のように領収書が伴ったものではない。

#### Ⅳ 慈済人のアイデンティティの創出

フーゼレン  
慈済人とは、一般的には、模倣防止のために工夫した「慈済服」（慈済会の独特な制服）を着る委員、「慈誠」と見習委員のことを指しているが、しかし証嚴師の理念に同感し、時々寄付をしたり、慈済会の社会奉仕活動に参加したりするボランティア（会員と非会員の双方）も含めてそう呼ばれることもあり、かれらによって厳密に定義されているわけではない。しかし本論では、慈済人のことを慈済会の独特な「慈済服」を着る委員と、「慈誠」および見習委員という正規メンバーに限定して考察する。

慈済会の制服は、慈済会を構成する重要な一部分であり、その着用は慈済人のアイデンティティにも繋がっている。慈済会の諸活動を運営する正規メンバーと、一時的なボラン



ティア参加者を識別するために「慈済服」が創られたのである。このような「慈済服」を身に着けることによって、慈済人としてのアイデンティティが形成されるのではないかと筆者は考えている。つまり、「慈済服」の着用は、慈済人のアイデンティティを構築するための手段だと捉えられると思われる。本章では、したがって「慈済服」に関してまず説明し、そのうえで、慈済会内部から創られた慈済人アイデンティティと、慈済会が外に向けて社会活動をする際の慈済人アイデンティティという、いわば内と外という2つの側面から、アイデンティティ形成の状態を分析してみたい。

## 1 制服からみた在家者の再編成

上述した委員および「慈誠」には、正規メンバーと認定されたとき、識別証とともに、ID番号が書かれた個人のベストが授受される<sup>23)</sup>。このベストは、一般会員および一時的に参加する非会員であるボランティア用とは区別されている(後述)。正規メンバーの慈済人は授与式を行ったのち、初めて「慈済服」の上にベストをまとうことが許される。

正規メンバーではない会員は、慈済会に寄付をしたときの領収証以外に、会員であること<sup>24)</sup>を証明するものは何もないので、それらの会員は会の管理外におかれることになる。このことは、つまり慈済会の正規メンバーとは看做されていないことを意味する<sup>25)</sup>。そこで非正規メンバーは、慈済会の名や信頼感を利用し、会活動以外の場で慈済会の名を借りた募金、借金、不正商売などを犯す可能性もある。そのため、正真正銘の慈済人かどうかを見分け、詐欺行為を防止できる簡単な方法として、服装による区別という方法がとられたのである。慈済会内の役割や、実際に奉仕活動を行う場面によって、着用する「慈済服」の様式は次のようになる。

女性委員には、異なる様式の「慈済服」3種がある。証厳師はそれぞれの服装に名称をつけている。つまり、労働作業に着る服を「藍天白雲」<sup>ランテンバイユン</sup><sup>26)</sup>、一般の仕事や外出訪問で着る服装を「八正道服」<sup>パツンダオフ</sup><sup>27)</sup>、儀礼儀式に参加するときの正装を「柔和忍辱衣」<sup>ローホレンルイ</sup><sup>28)</sup>と呼んでいる。これらの服装は、異なる場面に応じて使用されるようデザインされている。また髪型も規制されており、女性委員は髪型をそろえることを要求されている。すなわち頭髪を後ろに1つに束ね、黒いネットで覆い、その上に紺色の蓮の花の飾りをつけるのである。これらの服飾・髪飾りの購入については厳格に管理され、委員のみが手に入れることができる。なおかつ特殊な材料、デザイン、マークが用いられ、模倣品を作るのが容易ではないように工夫されている。

男性委員と「慈誠」の服装は、労働作業に着る、男女同式の「藍天白雲」と正装の「藍天スーツ」という2種だけである。スーツの色は濃い青色と決められており、これを「慈済藍」と呼んでいる。ネクタイとネクタイピンには、模倣品防止の工夫がされている。「慈誠」の髪型は丸刈りであり、それはよく働き忍耐強い精神を表しているという。これら男女それぞれに均一化された髪型は、「慈済の精神」を表すものであり、「慈済頭」(慈

済へア)と通称される。

男女委員および「慈誠」の個人ベストは、一般のボランティアのベストとは異なり、表と裏とが違色になっていて、一般の活動のときには黄土色の方を外に出し、裏の青色は服喪の場合にのみ用いられる。各委員の作業用ベストには、胸に委員のID番号が記されていて、それが委員の身分をあらわし、保管は各自の責任で慎重になされる。慈済会の内部では、このベストのことを「小袈裟<sup>シラウジヤサ</sup>」ともいう。

慈済会では、奉仕活動を行なう際に、正規メンバーの委員と「慈誠」のみならず、会員や非会員の一般人が、ボランティアとして慈済会のあらゆる奉仕活動に参加する者も、「志工服<sup>ツエーゴンフ</sup>」<sup>29)</sup>というベストを着用することが、厳格に義務付けられている<sup>30)</sup>。これは、一時的に慈済会のボランティア活動に参加する会員、あるいは非会員と正規メンバーとを識別するためである。「志工服」のベストの様式によって、正規メンバーとそれ以外のボランティアの身分が、区別できるようになっている。非正規メンバーのボランティアが着用するベストの様式は、正規メンバーのものとは異なっている。非正規メンバー用のベストは黄土色で、表側の左胸と背中に青色の蓮の花のロゴが目立つようにプリントされているが、個人別のID番号は付いていない。これらのベストは活動時間のみ着用され、普段は正規メンバーによって保管され、活動が終われば必ず正規メンバーに返される。

そのほか、非正規メンバーのボランティアなら、誰もが購入することができる服がある。それには慈済会のロゴがない灰色の上着、白色のズボンと靴で、男女とも同じ服装である。こうしたことから、一般者の誰でもベストを着けたときのみ、「慈済志工<sup>ツエーゴン</sup>」(慈済会のボランティア)となるのである。

証嚴師は、經典に由来する名称を「慈済服」に付けることによって、經文の意義を論している。慈済人が、周囲の人々に対して柔和で善良な態度で接し、かつ自ら修養して柔和と忍耐を課することで、よい縁を結び広げることを期待しているからである。証嚴師は認定授与式で、女性の委員に対して、「最も美しく最も気品のある衣服が『柔和忍辱衣』です」と論し、また慈済人の全員に対して「この服を身に着けているときには、身だしなみを整え慈悲深く柔和な心を持たねばなりません。一切の行動は、『私は仏陀の弟子である』、『私は慈済人である』という意識から離れてはいけません。」と論している。証嚴師は「慈済服」を仏教の言葉と関連付け、その意味を委員たちにわかりやすく解釈し説明しているのである。この「慈済服」を身につけることは、俗の空間と切り離されることを暗示し、だから会員たちは、自ら証嚴師の教えにしたがった行動に励むようになるのである。

## 2 制服着用の内的と外的な機能

慈済人が「慈済服」を着用するという効果は、世間にかねらの所属団体を知らしめること、及び会員が世間を欺く行為を防止することに繋がるだけではない。「慈済服」には、

かれら自身が、それによって慈済人であることを自覚する内的側面からのアイデンティティの形成と、外部から慈済人であるとみなされることによって生じる、外的側面からのアイデンティティの形成があると考えられる。これらについて以下4点にまとめて分析する。

## 2-1 慈済人というイメージの創出

「慈済服」を身に付けることは、「私は慈済人だ」ということを自覚する機能以外に、他人の好感を引き起こす役割も果たしている。筆者の調査によれば、慈済人のなかには、「藍天白雲」を身に付けることは、「格好いい」、「素敵」だと評価するほかに、一種のプライドでもあると考える者が多かった。最初に慈済会に参加しようと思った動機は、「あの制服が格好良から」、「『藍天白雲』を着た人がとても羨ましい」と語る人々が少なくない。かれらは慈済会に入会するまでに、すでに慈済会に対する好感をもっており、慈済人のように「素敵な制服」を身に着けることに憧れているという背景があるのである。このことから、慈済人というイメージは「慈済服」によって創られているといえよう。

## 2-2 制服を着用した者に対する言動から思想に及ぶ拘束力

慈済人は「慈済服」を身につけたその時から、その心理に変化が生じている。かれらは、今自分は慈済人であり、「慈済十戒」(第2節「委員」の項および注22参照)に背く行為をしてはならないと、たびたび自らを戒めている。筆者がインタビューした委員たちは、「慈済服」を着ている時に、信号のないところで、むやみに道路を横断したり、道ばたの屋台で食事したりすることはないと語る。かれらは街頭で行動するときにはなるべく「慈済服」を着ないようにしているし、もし活動後に着替える時間がなくてそのまま帰宅せざるをえないときには、路上での買い物や食事はしないようにしている。真っ先に帰宅して着替えてから他の用事をするのだという。「慈済服」を着ているときは人と言い争いもできないし、叱りつけることもない。ある委員は、家で子どもや夫にヒステリーを起こしたとき、家族に証厳師の話を思い出させられると、もう罵ることはできなくなるという。つまり、慈済人になった後、かれらの言動は少しずつ変化し、証厳師の要求に応える習性を身につけるようになるのである。

「慈済服」の着用により、人々は「自分は慈済会の人間であり、慈済会の恥となるような行為をしてはいけない」ことを意識する。つまり「慈済服」の着用は、内面的な意識の変化としてとらえることができる。それは上にあげた外側からの要因と合わせて考えると、慈済会の人間としてのアイデンティティを強化する機能をもっていると考えられる。

### 2-3 一時的出家の状態を暗示すること

慈済会内部では「志工服」のベストのことを「小袈裟」ともいうことから、ボランティアたちが「小袈裟」をまとうことは、僧侶のように出家した状態に等しいことを暗示している。「小袈裟」をまとうことによって、社会奉仕活動を行うことは、宗教的職能者の僧侶が、宗教的な領域で儀礼儀式を行なうことと、対比しうるような宗教的实践である。

慈済人による社会奉仕活動それ自体が、宗教儀礼的な機能をもっており、寺院で参拝するような宗教儀礼の形式はとらないものの、慈済人にとっては、そうした宗教儀礼と同様の効果をもたらすものであると考えられている。「小袈裟」と呼ばれるベストを着用することは、袈裟が僧侶の礼服に由来するメタファーで、こうした奉仕活動そのものが修行であることを、かれらに意識させているのである。それはあたかも、一時的な出家の状態であることを暗示している。

慈済会の創設者・証嚴師によれば、在家者である俗人が「慈済服」を身に付けることによって、出家者と同様にあらゆる行動を戒めなければならぬと求められる。つまりここに、一時的に出家した状態が作り出され、したがって、かれらの社会奉仕活動が、あたかも出家者の宗教的修行と同等だとみなされるのである。

### 2-4 内面と外面からみた平等の意味

「慈済服」の色や様式から、慈済会内部での役職を見分けることが出来ることは、これまで述べてきたとおりである。しかしその一方で、慈済会の説明によれば、「慈済服」を着用することは、年令、職業、社会的地位、貧富の差などに関係なく、その統一性を利用して、「衆生平等」という仏教教義を実践することになるのだという。

この点については、2つの側面からの解釈が可能であろう。慈済会内部という内的側面からの解釈では、奉仕活動の参加者に対して、どのような身分や社会的背景をもった人間に関わらず、参加者すべてがボランティアとして平等だ、ということが強調される。もう一方の外に向けた社会活動という外的側面では、制服の統一性によりその宗教色を薄めることで、同会が実施する社会奉仕活動への、非仏教徒の参加を促そうとしていることである。後者の側面に立てば、慈済会が仏教団体であるということにかかわらず、多くの人が慈済会の理念と奉仕活動を受け入れることができよう。また、ひとりでも多くの人に、仏教を広めようという布教の意図もみとれる。さらに、類似の制服の着用を通じた参加者らの一体化は、慈済会の活動に参加する非仏教徒の心理的な垣根を取り払う効果をもっており、かつ非仏教徒に対する奉仕活動においても、仏教団体であることを強く主張しない制服の着用は、救済対象者からの反発を和らげるメリットもある<sup>31)</sup>。制服着用の意図は、参加者内部の者同士を分け隔てようとする心を退け、平等な心を養うためだといわれる。これが「慈済文化」の特色だと称してもよい。

上述のボランティア及び慈済人が、「慈済服」によって彼らの身分を示すような例のほか、慈済会の関係機関で仕事をする有給職員にも、みな特定の形式の制服がある。そもそも一般の民間会社の社員が制服を身につけることは、台湾でも決して特殊なことではない。しかし、慈済会では有給職員のみならず、慈済会関係者であれば、小学校から大学の教員に至るまで、すべて制服を身につけなければならないのである。学校の教員が制服着用を、このように義務づけられることについて、慈済教育機関の職員 H 氏は「教育機関は、教員が身を以て規律そのものとならなければならない。学生に制服を着用させるのならば、教員も同様にすべきであり、これは『教師と学生は平等だ』ということ表現しているのだ」、「制服は名誉と責任をあらわし、『上人』<sup>32)</sup>が慈済人のためにつくった『菩薩イメージ』そのものののだ」と、話してくれた。しかし、このように服装統一を要求する規則を受け入れることができずに、辞職する職員もいるとも語る。

制服の規制に関連するもう一つの出来事がある。2004 年 6 月に、慈済病院に勤める医師が個人的に、ホスピスでのエピソードを本にして出版した。その本のなかで、ガン末期の病人まで病院の寝巻き着用を要求することは度を越えており、しかも人権侵害の行為であると、慈済会の制服規制を批判した。その結果、その医師の雇用契約は更新されなかった。その医師がそのことに関して、不満を語ったことが新聞で報道されてしまった。報道後、慈済会側は、何故あの医師の雇用契約を更新しなかったか、ということについて理由を説明した。慈済会側がいうには、当該医師が出版した本に書かれたことは事実ではなく、あくまでも著者の個人意見にすぎず、こうした勝手な言動が、慈済病院の名誉に損害を与えることになるという。医師の雇用契約は通常毎年更新される。しかし、彼は病院の制度に従わなかったので契約しなかったと、契約中止の説明をおこない、世論の騒ぎを抑えることに努めたわけである<sup>33)</sup>。

慈済会内部の解釈では、「慈済服」の着用による平等が強調されているが、その一方で、外部者から見ると、慈済会に制服は何種類もあり、その意味が分からないため、慈済会内部に階級の区別があるように見えてしまい、外部者には慈済会に階級差別がある、というイメージをもたらしてしまったのである。

## V 慈済人の構成からみた新たな結びつきの創出

台湾の人類学者・盧蕙馨<sup>34)</sup>は、慈済会のボランティア個々人の集合が、「千手千眼観音菩薩」<sup>35)</sup>として象徴化されている状況を指して、「神聖な紐帯」<sup>36)</sup>と呼んだ。この集団では、個々のボランティアたちが「千手千眼観音菩薩」の身体的な部分部分となっており、意識されているからである。そして、こうした役員とボランティア間の「神聖な紐帯」は、一般社会の人間関係とは異なっていると指摘する [盧 1999: 14, 2000: 297]。

証厳師は、他人に利益を与えようとする者は「菩薩」<sup>37)</sup>であり、慈済会の社会奉仕活動

が「菩薩」の行為そのものであり、じじつ慈済会のボランティアたちは自分たちを「菩薩のネットワーク」だと語っている。ここでいう「菩薩」とは、「他人に利益を与える人間」であるという意味で用いられている。仏教の教理では、人を助ける善行は神（God）に対する信仰や忠誠心の表現そのものではなく、各個人の心に備わる本性であるとするのである。

証厳師はしばしば、慈済会が推奨するボランティア活動と、「千手千眼観音菩薩」崇拜との関連性を強調する。それは証厳師が、苦しんでいる人を助けるために大きな病院を建てたその構想は、大勢の人たちの協力を得て初めて実現可能であり、「500人を集めれば『千手千眼観音菩薩』のようになれるではないか」と考えたからであるという [cf. 潘 2004: 30-31]。このように証厳師および慈済会に関しては、「千手千眼観音菩薩」にまつわるさまざまな語りが展開されている。例えば、「皆様（ボランティアたち）が私の目や手になってくれたから、皆様は菩薩です」と証厳師がしばしば語っていたとか、慈済人の多くが、「私は『上人』が観音菩薩であると信じている」などと語る<sup>30</sup>。また、証厳師が少女時代に養母の病気が治るように「観音菩薩」の名を唱え続け、そして「観音菩薩」に夢で会ったという、その語りもそうであった。こうした「観音菩薩」の連想は、出家者である証厳師が、仏教の教理を説く上で重要な意味をもっている。「観音信仰」が一般に普及している台湾において、人々は「観音菩薩」に対して深い親しみや信頼感を寄せている [林・蘇 2003]。証厳師や慈済会が布教活動を行うに際して、「観音菩薩」との関連性を連想させることは、その布教効果を向上させることに繋がっていると考えられる。また、台湾漢民族の信仰の根底にあるこの「観音信仰」[cf. 陳 2006 a] は、慈済会に加入し奉仕活動に参加するボランティアたちの、証厳師や慈済会に対する信頼、もしくは信仰を支えているのではなかろうか。

慈済会のボランティアたち、とりわけ慈済人と「千手千眼観音菩薩」とを関連付ける比喩を「神聖な紐帯」と捉えるならば、むしろ台湾の民俗宗教のコンテキストで理解されなければならないだろう。その次元において「菩薩」は、神として崇められる存在である。すなわち、証厳師が人間も「菩薩」であると強調しているにも関わらず、慈済会の人々は証厳師が語る人間としての「菩薩」を、かれらが慣れ親しんでいる民俗宗教における理解に関連させて、さらに証厳師のことを超世俗的な存在へと「神格化」しているのではないだろうか。

## VI おわりに

本稿では、台湾の仏教団体慈済会の発展の経緯と組織構成を概観して、慈済会の制服によって在家者を再編成する仕組みを指摘した。そして、これまでの調査資料をふまえ、台湾における現代の仏教を信仰する多くの庶民が、従来おこなってきた寺院に行って神仏を

拝んだり、法要に参加したりするような宗教実践に対し、慈済会の事例では、「志工」と呼ばれる慈済会のボランティアたちが、聖職者である証嚴師の教示のもとに、寺院で神仏を礼拝する代わりに世俗的な空間で社会奉仕活動を行ない、宗教的な目的を遂行するための実践となっていることを、これまで明らかにしてきた。

さらに台湾で、漢民族の間に普遍的に信仰されている「観音信仰」に関連づけて、「千手千眼観音菩薩」と慈済会の諸奉仕活動とを結び付けることによって、慈済会は個人修業と社会奉仕とが両立可能になる仕組みを整えていた。慈済会は、場所として宗教実践の空間を、寺院から世俗のあらゆる空間に移行させ、行動としても従来の寺への参拝と法要への参加から、社会福祉のような奉仕活動を行えるようにしたといえる。それは、台湾において従来の仏教在家者が行ってきたような宗教実践の活動から、社会実践の側面を持つ活動へと転換する、新たな宗教実践の方向を示しているといえるのではないだろうか。

## 注

- 1) 仏教の聖職者の英語表現としては、ordained (聖職者)、bonze (僧)、tonsured (剃髪出家者) などがある。
- 2) 台湾では、出家者のことを「出家人」あるいは「僧伽」(梵語 sangha の音訳、以下、出家者もしくは僧侶と表記) と称する。それに対して、在家者のことを「在家居士」(以下、在家者もしくは俗人と表記) と称する。
- 3) 慈済会の正規メンバーや会員ボランティアは、全員が仏教徒であるとは限らない。中には少数ではあるが、仏教とは別の宗教あるいは民俗宗教を持ち続け、単に社会奉仕活動に参加するという単純な動機を持つ者もある。これらのメンバーは仏教徒とは別だとみなしたい。本章で使用する在家者とは、慈済会の創立者釈証嚴によって帰依式を受け、かつ法名をもらっている大多数の慈済会メンバーである。
- 4) 現地語で「入世仏教」とは、この世を離脱することを求める来世志向(出世間)に対し、この世で積極的に生きている人間に関わるあらゆることに関与する、という意味である。
- 5) 「仏教慈済功德会」は、1966年5月14日、「仏教克難慈済功德会」という名称で成立し、1980年1月16日に「財団法人中華民国仏教慈済慈善事業基金会」として法人化された(陳2003)。
- 6) 1991年、慈済会はバングラティシュではじめて国際救援活動を開始した。2001年の時点で、海外における拠点の分布地域は、中南米に10カ国、アフリカに9カ国、西アジアに7カ国、アジアのほかの地域に9カ国、合計39カ国にある(仏教慈済基金会 2001:54-55)。NPO団体として各国地域において国際救援のみならず、無料医療診療や骨髄提供などの慈善活動が行われて、UNなどの国際組織にも注目されている[Huang 2003:141-147]。
- 7) クイーンによれば、現代的手段とは、例えば、マスコミ、政治的な影響、行動主義、法体系の訴訟、ないし資金調達、マーケティングなどである[Queen 1996:11]。
- 8) 第1に組織のリーダーは仏教徒と自認し、宗教改革者と見なされること、第2に原始教義(Ancient Dharma)に基づき、教義を再解釈していること、第3に当組織は公の場で仏教徒を代表で

きるほどの存在、である [Huang 2003: 137]。

- 9) 当時の医療技術からすれば危険な手術であり、彼女は「観音菩薩」の名を唱え続け、母の病気が治れば、自分の寿命が縮まってもかまわないと祈った。その祈りの後、彼女は次のような夢を3日間続けて見たという。それは、「彼女は小さな寺の中にいて、母が寝ていたベッドの傍で薬を煎じていると、部屋の入り口から白い雲とともに美しい女性が漂ってきた。女性は瓶の中から薬を彼女にわたしてから、ゆっくりと消えてしまった。彼女はその薬を母に飲ませた」というものであった [陳 2003: 7-10]。
- 10) 「普明寺」という地藏菩薩を祀る小さな寺であった。
- 11) 戦後台湾における全国的な仏教組織である。国民党政府による戒厳令が実施されていた当時 (1949-1989)、民間における出版・言論・集会・宗教などの自由は制限されていた。あらゆる宗教の活動、例えば、宣教する道場の設立などが制限された。僧侶は宣教のため海外へ行く場合、中国仏教会 (以下、中仏会) による審査で認定されてから、政府からの出国許可が下りた。中仏会が台湾における出家者を認定する儀式を行なう特権を持つ。1953-1993 年の 40 年間に、中仏会は年に 1 回、出家者の資格認定のような儀式として実施したり、あるいは中仏会の許可を得て寺院で行なわれていた。このことによって中仏会は、台湾における仏教徒出家者の「僧籍」を把握でき、仏寺院の管理をすることができた。
- 12) 結成した翌年に、当会の創立周年記念の機関紙に「我々が『慈濟』という名にしたのは、『慈悲為懷、濟世為志』 (常に慈悲を思い、世間を助けようと志す) を宗旨とする」という説明が掲載されている (『慈濟』第 21 期、1968 年 7 月 10 日)。
- 13) 台湾において「帰依」とは、在家者が仏教の僧侶 (出家者) に従って「帰依式」という仏教の儀礼を受けて、仏教において最も重要な「仏・法・僧」という三宝を信奉し、「五戒」 (不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不飲酒の五戒) を守ることによって仏教徒となることを意味する。
- 14) 当時は 5 名のみ、現在では約 150 名の女性出家者がいるという。
- 15) 慈済会の主体である NPO 組織としての基金会が運営するが、ほかに例えば出版・販売などの事業は、非 NPO の独立組織として運営されている。法的に許される範囲の営業収益を得ている。その収益は基金会の資金となる。
- 16) 慈済会のボランティアたちが資源回収やリサイクルなどで得た収入は、テレビ局営業の補助金となっている。
- 17) 「功德」はサンスクリット語で「guna」や「punnya」と呼ばれ、「よい結果をもたらすことのできる行為」を意味している。慈済会がこうした寄付金を「功德金」と呼ぶのは、寄付を通じて「功德」をつむことができると考えているからである。台湾では「〇〇功德会」という組織は、たいいてい民俗宗教や仏教団体によって作られたものが多く、慈済会のための活動ではない。
- 18) 筆者が 2005 年に慈済会日本支部を訪問した際に、当該支部の副支部長が提示した概算。この数字は慈済会自体が対外的に公表しているものであるという。
- 19) 2007 年現在、現地で台湾ドル 100 万円を日本円に換算すれば、350 万円になる。
- 20) 「名誉会員」になるための寄付は、一年以内に一括払いあるいは分割払いとも可能である。
- 21) 名誉会員は、慈済会の用語で「榮譽董事」、通称「榮董」<sup>ロンユードン</sup>。「董事」<sup>ロンドン</sup>とは、台湾において一般会



社で取締役に相当する肩書きである。

- 22) 「慈済十戒」とは、仏教の「五戒」および、煙草・麻薬・檳榔子の禁止、賭博・投機の禁止、親孝行・他人への親切の励行、交通ルールの遵守、政治活動への参加禁止である。
- 23) 正規メンバーを認定する授与式は、毎年年末に、花蓮市内の静思堂という大ホールで行なわれる。その際に、証嚴師は自ら新人メンバー1人ずつに識別証とベストを授与し、それとともに、「佛心師志」と書いてある紅色のリボンを、新正規メンバーの胸に付ける。これは、新しく正規メンバーになった人が「仏陀」の「心」及び、「師」の証嚴の「志」を常に思えるよう、励むようにとの意味がある。
- 24) 寄付金領収書に個人々の会員番号が載っているが、この番号はあくまでも会員登録番号であり、ほかに何も保証することができない。
- 25) 見習委員は、一定程度の研修と実際のボランティア活動参加という経歴が必要で、その後、先輩委員から仮認定を受けて正規メンバーになる。そこで始めて正規メンバーが着用する制服を購入することができるようになるので、この段階では、認定証と専用ベストを授受されていない。
- 26) 「藍天白雲」は、アメリカ支部で最も用いられたボランティア服で、青色の上着を「藍天」、白色のズボンを「白雲」に喩えている。慈済の活動中、慈済人はこの「藍天白雲」の服装で統一される。この服装には、青空のように広い度量を持ち、白雲のように清らかな行為をするという意味が与えられている。
- 27) 「八正道服」とは、女性委員の制服、青のスーツであるが、8つのボタンがあることから、仏教経典から「八正道」の語をその名としている。「八正道」とは、中道の道を歩むための、心と生活の基準である中道の生き方を教えるものである。8つの正しい道とは、「正見」（正しく見る）、「正思」（正しく思う）、「正語」（正しく語る）、「正業」（正しく働く）、「正命」（正しく生活する）、「正進」（正しく人と調和する）、「正念」（正しい目的意識を持つ）、「正定」（正しい反省と瞑想、禪定をする）である。この8つの規範に当てはめて毎日を生活することを示している。
- 28) 「柔和忍辱衣」は、慈済委員の紺色のチャイナドレスの別名である。この服装の名は、『法華経』第10品「法師品」中の菩薩道において、困難に遭遇する仏陀の1人の弟子に由来する。証嚴は経文の意義から、慈済委員が周囲の人々に対して柔和で善良な態度で接し、かつ、まず自ら修養して柔和と忍耐を課することで、よい縁を結び広げることを期待する。
- 29) 「仏教団体」を名乗る慈済会ではあるが、同会はいずれが推奨する社会奉仕活動へのボランティアのことを「信徒」や「信衆」と呼ばず、慈済会での用語で「志工」という。台湾では、ボランティアのことを「義工<sup>イーゴフ</sup>」というのが一般的であるが、証嚴師は、「義工」というのは義務という意味で、必ずしも自主的で永く続けるとは限らず、自己の判断次第でありうるが、『志工』は内心から発願して奉仕するという意味である」と独自の解釈をした。したがって慈済会では、ボランティアのことを社会一般的な用語「義工」とは呼ばず、「志工」と呼ぶのである[静思書齋 2002]。
- 30) 正規メンバーの慈済人は、制服の上に個人専用のベストをまとう。
- 31) 例えば、慈済会が1994年から慈善事業を開始したインドネシアにおいても、イスラム教徒が

- らの抵抗を受けずに慈善活動が実施出来ているという [cf. 劉雅嫻 2003 年 10 月]。
- 32) 「上人」とは、出家者に対する敬称である。日本の浄土宗や日蓮宗などこの言葉を広く使用され、単なる僧侶の敬称として用いられている [中村 2006: 542]。台湾社会においてもほぼ同義で証嚴師のことを「証嚴上人」、慈済会の内部では「上人」と敬称する。
- 33) 2004 年 9 月 16 日の台湾新聞『自由時報』の記事「慈濟癌末病房 被批違反人性」(花 2004)。
- 34) 盧蕙馨は、2007 年現在、慈済会の諸事業に属していて、慈済大学の宗教文化研究所所長を務めている。
- 35) 「千手千眼」というのは、千の腕と千の眼を持つということで、それによって一切のものを救う威神力をあらわしているという。もっとも、実際の千手千眼観音は千本の腕をつけているのではない。普通は 40 本の腕をつけているだけである。その 40 本の腕が体の周囲に扇をひろげたようにつけられ、それぞれの掌にひとつずつ眼球が描きこまれている。つまりそれで、千手千眼を象徴的にあらわしているわけである [山折 1993: 124]。
- 36) 盧は「神聖な紐帯」という概念について、それ以上の定義や解釈をしていないものの、sacred solidarity という英訳を当てている [盧 1999: 1]。
- 37) 大乘仏教においては、菩薩は「凡夫菩薩」と「聖者菩薩」とがあるとされていて、凡夫(凡人)は求道の心を持って実践するがゆえに「菩薩」と呼ばれる。よって台湾以外に、一部の大乘仏教を信仰している一部の華人社会では、「菩薩」が人への尊称となりうる。ここでいう「菩薩」とは、台湾の現地語として理解されている「他人への利益を実践する人間」という意味に限定する。
- 38) 筆者が花蓮で下宿したことのある宿主は、家に掛けている証嚴師の写真を指して「上人は観音様ですよ」と言っていた。これは慈済会の出版物にもしばしば類似の表現がなされており、ボランティアによって語られることがある。

## 参考文献

### 【和文】

金子 昭

2005 『驚異の仏教ボランティア』白馬社。

陳 文玲

2006 a 「台湾における観音信仰——桃園県観音郷の「石観音文化祭」の事例から——」『民俗文化研究』7: 140-163。

2006 b 「宗教実践としての『病院奉仕』——台湾における仏教団体の事例から」『社会人類学年報』32: 109-126。

陳 慧剣

2003 『証嚴法師と慈済世界』(陳植英訳) 仏教慈済センター。

中村 元

2006 (1989) 『岩波仏教辞典』(第二版) 岩波書店。

仏教慈済基金会

2001 『仏教慈済基金会のご案内』 仏教慈済センター。

劉 雅嫻

2003 「ジャカルタ大愛村のオープン式典が開催される」『慈済ものがたり』82:19-21。

ランジャナ・ムコパティヤーヤ (Ranjana Mukhopadhyaya)

2005 『日本の社会参加仏教—法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理』 東信堂。

山折 哲雄

1993 『民俗仏教学』 講談社。

# 【中文】

王 見川

2005 「透視故事的背後：『仏教慈済功德会』の早期情況（1966～1971）」『台湾仏教の探索』 范純武等（編）、pp. 265-305、博揚文化。

何 国慶

2000 『考驗——証嚴法師面對挑戰的智慧回應』 商智文化。

林 美容・蘇 全正

2003 「台湾の民間仏教と『嚴仔』の観音信仰之社会实践」『新世紀宗教研究』2-3:1-34。

花 孟璟

2004 「慈済癌末病房 被批違反人性」『自由時報』（中華民國93年9月16日）

陳 慧剣

2004 『大愛灑人間——証嚴法師の慈済世界』 仏教慈済慈善事業基金会。

潘 煊

2004 『証嚴法師——琉璃同心円』 天下遠見出版。

静思文化（編）

1968 『慈済』第21期（1968年7月10日）。

静思書齋（編）

2002 『有朋自遠方来——与証嚴法師對話』 天下文化書坊。

慈済文化志業中心編集部

2000-2004 『慈済年鑑』 慈済文化出版社。

盧 蕙馨

1999 「慈済医院志工の身体思考と道德論述」 宗教伝統と社会实践研討会、中央研究院民族学研究所。

2000 「現代仏教女性的の身体語言与性別重建：以慈済功德会為例」『中央研究院民族学研究所集刊』88:275-311。

釈 証嚴

2005 「我思・我師・人間導師」『慈済月刊』463:6-9。

著者不明

1968 『慈済』第21期。

## 【英文】

Barnes, Nancy J.

- 1996 'Buddhist Women and the Nun's Order in Aisa' *Engaged Buddhism : Buddhist Liberration Movements in Asia* pp.259-294 State University of New York Press, Albany.

Huang, Chien-Yu Julia (黄倩玉)

- 2003 'The Buddhist Tzu-Chi Foundation of Taiwan' *Action Dharma : New Studies in Eengaged Buddhism*. pp.136-153 Christopher Queen, Charles Prebish and Damien Keown (Ed.) Routledge Curzon.

- 2005 'Globally Engaged Buddhism : The Buddhist Compassion Relief Foundation from Taiwan' 『台湾宗教研究』 5-1 : 1-38。

Queen, Christopher S.

- 1996 'Introduction : The Shapes and Sources of Engaged Buddhism' *Engaged Buddhism : Buddhist Liberation Movements in Asia* pp.1-44 State University of New York Press, Albany.